

## 【NPO通信】

## インドネシア教育振興会(8) 希望と夢の土台づくり

2010年5月25日

小学校の建設などインドネシアの教育問題に取り組むインドネシア教育振興会(IEPF)。今回は、現地で建設に協力した富山市の森田建設の代表取締役の森田徹さんに現地を見たこと、感じたことを書いてもらった。

私は若いころに、スキー学校のインストラクター仲間とIEPFの窪木靖信さんの「徹さん、インドネシアへ一週間行ってください」の一言で現地ボランティア行きを決めた。IEPFの活動や窪木さんの考え方を聞くうちに「自分でも力になれることがあるなら」と決断した。

ジャカルタの空港から約二時間のセレポン市は、都会的なたずまいで途上国というイメージはなじまないが、車で十分ほど行くと、未整備で日本とは違った景色が目に入る。

ある種の懐かしさすら覚えるような場所に、小学校建設地があった。到着すると、作業員の地元の村人十数人が既にはだして掘削工事を始めていた。

立っているだけで滝のような汗が流れる中、元気に作業していた。日本では重機一台と補助員がいれば一日とからない仕事だが、貧困地では重要な収入源となると重要な仕事で、村にとっても大切なものだ。

私は学校を設計したイルファン氏と、設計図について話す機会があった。彼は若い優秀で深い理解がうかがえる信頼できる人だった。作業に携わる村人を対象に、施工やコンクリートについての講習会を開いた。村人らは一応の知識を持った人が多く、スムーズに伝わったが、とにかく道具や物が少ない。

その中で作業する彼らは、ある意味「日本よりも技術力が上かも」と考える自分がいた。村人から「日本人は腰が痛くならないのか」と尋ねられ「世界中同じだよ」と答え、にぎやかに笑う村人の顔が強く印象に残っている。

建設現場には何人もの子どもたちがどこからとなくやって来た。表情はとても明るい、この村や周辺には身寄りのない子どもが五十人、ひとり親の子どもは七十人以上いるという。(身寄りがなかったり、ひとり親の子どもが多いのは)この地域は教育を受けていない人が多く、十二歳ほどで社会に出て早く結婚するが、生活力が無く、親が子どもを捨てたり、(親自身が)過酷な労働で早く死亡するのが原因らしい。

子どもたちが学校へ行き教育を受けることで、将来に対する希望や夢を持つ土台づくりになるこの事業に、少しでも力になればうれしいと強く思う。(森田建設代表取締役・森田徹)



地元住人に建設指導をする森田代表取締役＝インドネシア・セレポン市郊外で